

4.20 「聖教新聞創刊記念日」

1 枚目／創刊の原点 (5 枚目の裏に貼る)

1950年（昭和25年）8月24日、戸田先生の事業は危機に瀕していました。新聞記者がスクープ記事にしようと接近してきましたが、22歳の若き池田先生が矢面に立って渉外にあたり、戸田先生の実像を記者に語り抜きました。

その上で、8月24日に戸田先生は記者と会見し、いかげんな記事が出る憂いは消え去ったのです。この時、戸田先生は池田先生に語りました。

「新聞をもっているということは、実に、すごい力をもつことだ。学会も、いつか、なるべく早い時期に新聞をもたなければいけない。大作、よく考えておいてくれ」

この日が、機関紙発刊の構想が語られた「聖教新聞創刊原点の日」となりました。

2 枚目／新聞発刊・「聖教」という紙名 (1 枚目の裏に貼る)

その年の12月、東京・新橋駅近くの質素な大衆食堂で、戸田先生は池田先生に、新聞発刊への思いを語りました。「これからは言論の時代だ。断じて言論戦で、広宣流布を切り拓こう！」

翌年3月には、新聞発刊に向けた最初の企画会が持たれました。以降、何度も編集会議が重ねられ、「文化新聞」「創価新聞」などの案が出されましたが、最終的に「聖教新聞」に決定、1951年（昭和26年）4月20日に創刊となりました。

当時の紙面では、1面の論文、小説など戸田先生自らペンを執り、池田先生も歴史上の人物紹介や言論界の誤った報道を正す記事を執筆しました。

聖教新聞は、学会が最も大変な状況の中で、師弟一体の闘争によって創刊された新聞なのです。

3 枚目／小説『人間革命』 (2 枚目の裏に貼る)

聖教新聞の創刊当初から戸田先生は、自らの戦時中の獄中体験などを綴った『人間革命』を連載するなど、言論戦を展開していきました。

戸田先生亡き後、第三代会長に就任された池田先生は、1965年（昭和40年）新年号より小説『人間革命』の連載を開始します。それは、恩師の生涯と精神を書き残そうとの強い一念からでした。

戸田先生が『妙悟空』というペンネームで執筆したのに対し、池田先生は『法悟空』のペンネームを使っています。池田先生は「(仏法の原理からいえば) 妙は師、法は弟子となる。私の師は戸田先生である。ゆえに、弟子の私が、法悟空と命名。」と綴っています。新聞連載回数日本一となった『人間革命』執筆の源は、まさに師弟不二の精神に貫かれているのです。

4 枚目／無冠の友・陰で支える方への感謝 (3 枚目の裏に貼る)

聖教新聞は悪天候の日でも、その日のうちに日本全国の隅々にまで届けられています。
池田先生は、聖教新聞の配達に携わる全ての人への感謝を次のように語っています。
「わが家にも、毎朝、雨の日も風の日も、尊き無冠の友が聖教新聞を届けてくださる。私は妻と共に感謝・合掌して、全国のこの尊き広布の使者の方々の御健康を、無事故を、御多幸を祈る日々である。
配達員のご家族の皆様、販売店、印刷・輸送に携わってくださる方々、そして全国の新聞長、通信員、さらに聖教を守り、支え、応援してくださるすべての皆様方に、心から御礼を申し上げます。」

5 枚目／池田先生の想い (4 枚目の裏に貼る)

池田先生は小説「新・人間革命」をはじめとし、随筆、和歌、詩などの原稿を寄せたり、時には、紙面の割付のアドバイスをするなど、筆者として最後の最後まで、読者のために紙面に手を入れてられています。
池田先生は聖教新聞への想いを、こう綴っています。
「わが聖教新聞は、師弟の心の金剛不壊の絆であり、世界の民衆を結ぶ架け橋である。民衆の、民衆による、民衆のための、かけがえのない言論城なのだ。ともあれ、読者の皆様のために、尊き同志の前進と勝利のために、聖教はある」と。
師弟一体の闘争から発刊された「聖教新聞」。大仏法の慈悲の精神をもとに、世界の平和、人類の幸福の追求をめざす聖教新聞は、永遠に民衆と共に歩む“人間の機関紙”なのです。

決意など